

登場人物

美咲（みさき）

20歳

大学入学してから始めたオンラインゲームにドハマリ中の女子大学生。

航（わたる）

27歳

オンラインゲーム仲間のひとり。いつもの確な指示で助けてくれる古参勢。

「おりゃ！いけいけ！」

深夜のワンルームに、私の景気のいい声と電子音が響く。画面の中では、仲間たちとのボス戦がクライマックスを迎えていた。

動画サイトで見たゲーム配信をきっかけに、私は数か月前からオンラインゲームにハマってしまった。大学入学と同時に買った、お世辞にも高性能とは言えないノートPC。それでも、グラフィック設定を最低にして、カクつく画面と格闘しながら、私はこの世界にのめり込んでいた。

（やっぱりストレス解消にはゲームが一番スッキリする！それに、女子大生ってだけで、割とみんなチャホヤしてくれるしね……）

ゲームって一人で家に籠ってするものだと思っていたけど、今やネット上で知り合ったいろんな人と一緒にやるのが当たり前の時代だ。そして、男の人口が圧倒的に多いこの世界では、女ってだけでちょっと大事にされる。その感覚も、ハマってしまった原因の一つかもしれない。

「っしや！あと一撃ィ！」

その刹那。

ブツッ、という嫌な音。そして画面は真っ暗に。え？嘘？

「ちょ、待っ……！」

電源ボタンを連打しても、うんともすんとも言わない。焦ってACアダプターを抜き差しするけど、ランプすらつかない。やがて、PCの奥底から聞こえてきたのは、か細く、そして絶望的な「びゅーん……」という断末魔だった。

（終わった……私の青春が……っ！）

大学生活の暇な時間は、ほぼすべてゲームに捧げてきた私にとって、これは死刑宣告に等しい。新しいPCなんて、カフェのバイト代じゃ逆立ちしたって買えやしない。

あまりのショックに、私はスマホを掴み、ゲーム仲間と共有しているSNSアカウントに、震える指で打ち込んだ。

『【悲報】私のPC、逝く。しばらくインできません……。みんな、私のこと忘れないでね（号泣）』

投稿すると、すぐに仲間たちから「Misapon、まじか!」「どんまいw」「早く戻ってこいよー!」なんてリプライが飛んでくる。ありがたいけど、慰めは私のPCを復活させてくれないのだ。

しょんぼりしていると、一件のDM通知がポップアップした。送り主は『Kai』さん。「Misaponさん?使っていないノートPCあるけど、要る?一応去年のモデルのゲーミングPCだから、悪くないと思うけど」

(K a iさん!?あの、いっつもインしてる謎の人!)

ギルドの中でも古参で、めちゃくちゃ強いんだけど、リアルが謎に包まれている人。勝手なイメージだけど、きっと親がお金持ちのニートか何かだろう。そうじゃなきゃ、あんな時間に毎日ゲームできないもん。

『えっ!?ほ、本当ですか!?でも申し訳ないです……涙』

『気にしないでいいよwうちP Cあまってるからw』

(P C余ってる人なんているわけじゃないじゃん……オタクくんだから、女子に見栄張りたいのかな)

『じゃあお言葉に甘えさせてもらいます♡K a iさんありがとうございます♡』

可愛く返信してあげる私。きっとこれでオタクくんも満足だろう。

『いいよ。家、どこ？うち○○だけで』

（郵送じゃなくて手渡し？まあ、家めっちゃ近いけど……でも住所知られたくないし……取りに行くかあ）

『あ、取りに行ける範囲なんで、私がそちらへ行きます！』

『おk。明日の午後とかどう？住所送るね』

（やったー！やっぱり女ゲーマーって最高！）

『はい♡よろしく願います♡』

＊

そして翌日。私は指定された住所の前で、冷や汗をかいて立ち尽くしていた。
目の前には、天に突き刺さるような超高級タワーマンション。

(……え、ここ？本気で？私、場違いすぎない？)

PCもらうだけだし、適当な服でいいかと思い、胸元や二の腕が露出したノースリーブと、デニムのミニスカートという超ラフな格好で来てしまった。もちろん、ちょっとでも露出があった方がオタクくんにもたチャホヤされるかなという思惑もあった。

しかし、そんな服装には全く似合わない高級外車が並ぶエントランスを見て、完全に気圧されてしまう。こんなところに住んでる人が、私と同じゲームやってるなんて、信じられない。キョロキョロと挙動不審になっていると、エントランスのガラスドアの向こうから、一人の男性が出てきた。

(うわ……イケメン……)

サラサラの茶髪で涼し気な目元。透けるように白い肌。スラっとしたモデルみたいな体型。なんだか陽の光を浴びたことがなさそうな、気だるげな雰囲気。

その人が、最新モデルっぽい薄型のノートPCを小脇に抱えて、真っ直ぐ私の方へ歩いてくる。

（え、まさか……いやいや、そんな……）

でも、彼は私の目の前で足を止めた。そして、涼しげな瞳で私を見下ろす。

「……Misaponさん？」

「は、はいっ！み、Misaponです！もしかして、Kaiさん……ですか？」
「ん、そうけど」

（うっそ、マジでこの人…!?オタクニートじゃなかったの?）

あまりの衝撃に言葉を失っていると、彼がくすつと笑った。

「そんな驚く？」

「だ、だって！まさかこんなマンションで……てっきり実家住みのニートかと……」

「ひど。で、P C、要るんですよ？」

「は、はい！ありがとうございます！あの、でも本当にいいんですか？高価なものいただきたい……」

「別にいいけど。今年は相場に乗れてて結構稼げてるし」

「そ、そうば……？」

「うん、俺、トレーダー」

（とれーだー？って株とかやる人……？）

首を傾げていると、彼がノートP Cを差し出してきた。私が「わー！」と手を伸ばしかけた、その時。彼はすつとP Cを引っ込めた。

「ん？」

「タダであげるなんて、言っていないけど」

意地悪く笑うKa iさん。何かを企てるような目で見られて、ぎゅ、と身体が固まってしまう。

「え、あ、あの、じゃあお金……」

「金はいらない」

「じゃあ……？」

彼は私の背後に回り込むと、私の肩にポンと手を置いた。細くて綺麗な指先が、肩に触れる。

（ひゃっ!?)

心臓が跳ねた。彼の体温が、服越しにじわりと伝わってくる。

「とりあえず、部屋、上がって。んで――」

耳元で、彼の静かな声が囁いた。

「肩、揉んで」

「……………は？」

＊

「……………っしょ、っと。こんな感じ、ですか？」

「んー、もうちょい右。あ、そこそこ。……………きくー」

（いや、『きくー』じゃないんですけど！？！？なんで私、初対面の男の人の肩揉んでるの！？し

かも、こんな……こんな、ありえないくらい豪華な部屋で！)

私の指先には、K a iさん……改め『航さん』の意外なほどガチガチに凝った肩の感触。そして目の前には、ドラマや漫画しか見たことないような、6台のモニターがずらりと並んだデスクが広がっている。さっき通ってきたリビングも、窓からの景色も、なにもかもが私の日常とはかけ離れていたけど、この仕事部屋は特に凄かった。

(本当に、この人がK a iさん……？あの、いつもゲームで淡々と指示出してくる……？)

混乱する私の頭の中を知ってか知らずか、航さんは気持ちよさそうに目を細めている。

「いやー、ほんと助かる。もう肩ガチガチでさ」

「そ、そうみたいですわ……」

「午前の相場でトレードして、午後からはずっとゲームしてるから。そりゃ肩も凝るよな」
(午前中だけ働いてるってこと？だからあんなにいつもゲームできてるんだ……)

「そうだ、せっかくだし、今日は肩揉んでもらいながらちょっと午後相場でも遊ぼうかな。

普段より勝てるかもしれないし」

航さんは楽しそうにいくつかのモニターの電源を入れた。途端に、画面には無数の数字とグラフが踊りだし、まるで生き物のように動き始める。彼の指が、キーボードとマウスの上を滑るように動き出す。

カチ、カチ、カチ……ターン

軽やかなクリック音とは裏腹に、画面上の数字はとんでもない勢いで変動していく。

なんだか見ているだけでドキドキしてくる。すごい……。ゲーム画面とは比べ物にならない情報量とスピード。鼻歌を歌いながら画面をさばっていく。

『決済完了』

不意に、画面の一つにその文字が浮かび上がる。

「あ、あの、今のって……?」

「ん?二十万くらい利確」

さらい、と彼は言った。

「に、にじゅうまん!？」

思わず声が裏返る。

（私のバイト代の……えっと、3ヶ月分以上!?それが、たった今、この数分で!?……嘘でしょ!?なにこの人!ニートどころか、とんでもないお金持ちじゃん!）

私の驚きをよそに、『決済完了』の文字は、その後も数分おきに画面に現れた。目の前の非日常的な光景と、肩越しに伝わる彼の体温に、頭がぼーっとしてくる。

いつの間にか肩を揉む手は止まり、あんぐりと口を開けたままPCの画面を見つめてしまった。

30分ほど経っただろうか。航さんは「ん」と伸びをして、「まあこんなもんな。お疲

れ様」と言って、あっさりとP Cの電源を落とした。

「お、お疲れ様でした……！はあ……航さんってすごいお仕事されてるんですね！それから、こんなすごい設備、初めて見ました……！」

麻痺した頭でも、感嘆の声だけは漏れてしまう。すると、航さんはくるとチェアを回転させ、私を見てにっと笑った。

「大したことないけどね。ここ、座ってみる？」

「えっ!? い、いいんですか!？」

わーい！と子供みたいに喜んで、私は促されるままにそのふかふかのチェアに座らせてもらった。

（うわあ……！何これ！雲の上に座ってるみたい……！）

身体全体が優しく包み込まれる感覚に、思わずうっとりしてしまう。こんな椅子に座ってゲームしたら、絶対最強になれる……！私が一人で感動に浸っていると、ふわり、と背後から航さんの気配がした。

（え？）

次の瞬間、私の肩に、彼の細くて長い指がそっと置かれた。

「ひゃっ!？」

びくりと跳ねる私の耳元に、彼の低くて、少し掠れた声が、甘い吐息と共に囁きかけられる。

「美咲ちゃんの手つき、とっても気持ちよかったよ」

「あ、それは、どうも……」

「じゃあ今度は、俺の番、かな？」

ドクン、と心臓が大きく鳴った。さっきまでの喧騒が嘘のように、部屋がしんと静まり返る。

「そうだ。せっかくだからうちの設備で、いつものやってみてく？」

航さんは私の後ろから手を伸ばし、カチ、カチとマウスを操作する。私のすぐ横に顔があって、体温を感じるほどだ。

（近ッ！ていうか、肌綺麗すぎ……）

じゃーん！という耳なじみのある音がして、見慣れた画面がモニターに表示される。私たちがいつもやっているゲーム。でも、PCやモニターの性能が違いすぎて、全く違うゲームみたいだ。

「うわっ！すごい！いつもこんなに綺麗な画面でやってるんですか！」

私はつい興奮してしまう。

「ははは。美咲ちゃん結構ラグかったもんなあ。PCも回線も、ボロボロなのによく頑張ってるよね」

「ボロボロって…」

「いいよ、せっかくだからプレイしていきなよ。それから……よかったらモニターもあげようか？プロが使ってるマウスやキーボード、ネット回線が速くなる最新のルーターだってあるよ」

「え、そんなにいいんですか？」

「まあ、もう少し仲良くなったらあげてもいいよ」

航さんの指が、再び私の肩に触れる。その指が、つつ、と移動し喉すじを撫でる。

「あっ…？♡」

「ほら、プレイしてみて」

「……は、はい」

私はキーボードとマウスを操作して普段通りにゲームを始める。でも……

「うん、うまいうまい」

そう言いながら、航さんの指が移動し、爪が耳に触れる。カリカリ、カリ、と不規則なリズムで耳の中を刺激される。

「わ、航さんっ♡あ、あの……♡そんなとこ触っちゃ、だめです♡」

「んー？集中しないと、ほら、やられちゃうよ」

（そんなこと言われても、何されるか気になっちゃうっ……！）

かりかり…♡さわさわ…♡かりかりかり…っ♡

「やあ……っ？あっ♡だめっ……♡」

「耳が嫌なら……こっちにしようか」

航さんの指は再び首をつたい、今度は胸元……私のデコルテあたりをすりすりと撫でて触りだした。

「えっ!?そ、そんなところ、さすがにだめですっ!」

「そう?……P Cとモニター、欲しくないの?」

「うう、それは……」

「ほら、負けないようにしないと。僕、今19連勝中だから、負けちゃったら記録途絶えちゃうんだよね」

(ええッ……!?そんな大事な場面なの?)

一瞬モニターに集中した時だった。

「ひあ…っ!?」

航さんの指が、スツとノースリーブの中に入ってきた。人差し指と中指が、乳首を挟むように、でも乳首には触れないように、乳輪のあたりをくにゅくにゅ♡と刺激する。

「ひゃああう♡」

「ん、可愛い声」

満足げな航さんの声が後ろから聞こえてくる。

「ほら、やられちゃうよ」

「やつ、む、むりい…♡」

乳首の周りをすりすりされているだけなのに、ぞくぞくと背筋に痺れが走ってくる。

「美咲ちゃんのおっぱい、やわらか」

「ん…やあ…っ♡あっ、さわっちゃ…!!」

「俺に気を取られてないで。ゲーム画面見て」

（無理、無理無理無理……！航さんの触り方、えっちすぎて集中できない…）

「ふうう……♡あっ、はあっ……♡」

集中！と画面を見て、クリアを目指そうとしても、ふにふにと膨らんだ乳輪の感触を楽しむように触れられ、頭が働かなくなってくる。

「ほら、早くしないと」

航さんが耳元で囁いた。

「負けちゃうよ」

「はあっ♡だめえ…♡ああ…っ？♡♡」

私は思わず甘い声を上げてしまう。でも、航さんは手を動かすのをやめてくれない。それどころか、私の耳たぶをはむっと口に含んできた。

「ひゃあっ!? やッ…♡耳、だめえ…ッ♡♡」

「耳も感じちゃうの?」

航さんは楽しそうに笑うと、さらに深く舌を入れ込んだ。ぴちゃぴちゃという音がダイレクトに脳に響く。そしてそのまま私の耳の穴をれるおっつと舐め上げたかと思うと、今度は耳たぶにかぶつと歯を立ててきた。

かりっ♡ちゅぶ…♡ちゅぶ…♡ちゅぶ…♡かぶっ♡かぶっ♡

「ひゃあ…っ♡あ、あ、あっ♡それやだあ…ッ♡」

「感度いいんだね」

航さんの吐息混じりの声が耳にかかる。むくむくと乳首が硬くなってブラに擦れている

のを自覚して恥ずかしい。

「ほら、俺の連勝止めちゃダメだよ」

（そんなぁ……！）

快感で目を閉じそうになるのを我慢して、私は必死に指を動かしたけど、全然うまく操作できない。足がもじもじと動いてしまう。

その間にも、航さんは私の耳たぶをはむっ♡かぷっ♡と甘噛みしたり、耳の中に舌を入れたりしてくる。

「あっ♡やあっ…♡んんう…っ♡」

「ふふ、可愛いね」

「だめ……！！負けちゃ……」

私の足掻きもむなしく、ちゅーん、という音を立てて、キャラクターは負けてしまった。

画面には「Game Over」の文字。

「あーあー。俺の連勝が」

「ご、ごめんなさい……でも航さんが……」

悪いでしょ、と言おうとした時だった。

「ひぁあああッ……？♡♡♡♡」

ずっと周りを刺激され、敏感になっていた乳首を、二つの指でぎゅううっ♡と挟まれ、その刺激で、体全体がびくん！と跳ね上がる。

「人のせいはよくないね。罰ゲームだよ」

ぎゅっぎゅっ挟みこまれて揉みこむように乳首を弄ばれる。

「ひあ、あっ、あっ…♡それっ、んじゅっ♡♡」

「ん？これ好き？」

航さんはそう言うと、もう片方の乳首も、私の親指と人差し指で摘まんだまま、くにくに♡と動かし出した。

「やあああっ♡♡それっ、それえ♡りょうほうしちゃ…♡♡♡」

「ふふ。美咲ちゃん、ゲーム弱いけど、乳首も弱いんだ？」

航さんは嬉しそうに笑うと、さらに指の動きを激しくしてきた。ゆさゆさとおっぱいが揺れるほど乳首を引っ張られる。

「ああっ…？♡やあ、あっ…♡ひんんッ♡」

おへその下がむずむずして熱い。絶対濡れてる。もじもじもじ、と内股になって動いてしまう。

「ん、どうしたの？腰動いちゃって」

「…はあっ♡だってえ♡航さんがあ……っ♡」

「俺が？」

（体験版ここまで）